



Shanti

シャンティ

273

2014年1月
ふゆ

特集

シャンティ の 精神

『シャンティ』通巻273号2014年1月1日発行
(1・4・7・10月の1日発行)

1985年6月28日 第三種郵便物承認



公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

新年のお慶びを申し上げます。

読書推進と図書館活動の大切さが
社会に浸透するように、

2014年から5年間かけて、

中期計画に基づきよりしっかりと活動を進めていきます。

また、34年目を迎えて、

私たちは今、自分たちの足下を見つめ直しています。

「SVAがめざす姿」とはなにか。

年頭にあたり、SVAが活動で大切にしている価値観を、

もう一度考えてみたいと、歴史を振り返りました。

どうぞ本年もよろしくお願いいたします。

Index

シャンティ 273号 目次

4 シャンティニュース ミャンマーで活動を始めます

6 定点観測…アジアから

カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
アフガニスタン／岩手／気仙沼／山元／東京

14 特集 シャンティの精神

仏教ボランティアの先駆者、敬尊／協働する宗教者たち
鼎談 わたしの、シャンティの精神
有馬嗣朗×伊藤美希×自覚大道／ブックガイド

25 日本しゃんていな旅 玄照寺

26 世界の絵本を読んでみよう

創作絵本「クメールの宝物」カンボジア（2005年）

28 シャンティな人たち

星野光一さん・平野智也さん（NECソフト株式会社）

30 スタッフの晩ごはん 気仙沼事務所

31 おしらせ／編集後記

32 道 本当の支援活動とは人の意識を変えること 有馬嗣朗

シャンティ ニュース

Winter 2014

ミャンマーで 活動を始めます

昨年11月、イエ・トゥ情報副大臣が参列のもと、ミャンマー情報省の情報広報局長と若林SVA会長が覚書に署名をし、いよいよミャンマー国内で「児童の読書推進プロジェクト」がスタートしました。

2003年のアフガニスタン事務所開設以来、10年ぶりに新たな活動国を得て1月から日本人職員を派遣し、ヤンゴンに事務所を開設、バゴ管区のビー県とタヤワディ県で活動を開始します。

イエ・トゥ副大臣は、署名式の後行われた昼食会において、「SVAが出版したタイ国境での難民キャンプの本を拝見した。ミャンマー語、カレン語だけでなく、今後は他の少数民族の言語でも図書

出版を行ってほしい。最近では、欧米のNGOが多くミャンマーで活動しているが、SVAはミャンマーと同アジアの価値、文化を共有しているという点で、比較優位があると思う。SVAには、他国での読書推進、図書開発の経験、知識をミャンマーの関係者に分かち合ってもらいたい」と期待を寄せました。

ミャンマーの教育は、カンボジア、ラオスと比べて困難な状況にあります。小学校

の純就学率は88%ですが、5年生まで通っているのは56%にすぎません。半数の児童が小学校を終えないまま、大人になっています。学校に行っていない児童は58万人以上と推測されています。

(三宅隆史)

バゴ管区
ビー県 (105万人)
タヤワディ県 (129万人)

寺院学校改善
ノンフォーマル教育
公共図書館



首都ネピドーで行われた調印式
情報広報局長(左)と覚書を交換する若林SVA会長(右)

SVAがミャンマーでおこなう4事業

「寺院学校改善」事業

仏教寺院が運営する学校は全国に1500校ありますが、政府からの財政支援はなく、コミュニティの自助努力で成り立っているため、学習環境は劣悪な状況にあります。

SVAは3年間で7つの校舎の建設を支援し、14校の教員を対象に研修をし、図書を供与します。また2校の寺院学校に併設された孤児院の建設を支援します。

「公共図書館の 児童サービス改善」事業

ミャンマーにはすべての県、市にあたるタウンシップに公共図書館がありますが、児童書は少なく、司書も児童サービスの研修を受けたことがありません。

SVAは、児童書の供与、司書の研修、児童書コーナーの設置、インターネットアクセスのためのコンピューターの供与、移動図書館活動のためのバイクの供与を、ビー県、タヤワディ県のすべての14図書館に対して行います。

「児童図書の改善」事業

ミャンマーは書籍の商業出版は活発に行われていますが、絵本を含む児童書の質はまだ低い状態です。

ミャンマー作家協会との協力により、「児童図書コンテスト」を行い、幼児向け、小学生低学年向け、小学生中高生向けの図書の原稿(原画)を募集し、入賞作品6作品を出版します。出版された子どもの本は、全国の図書館に配布されます。



「夜間小学校」事業

現地NGOの協力により、6カ村の540人の就労児童に学習機会を提供します。





みんなで作る学校図書館

カンボジア **Cambodia**

報告：萩原宏子（カンボジア事務所）

明るいクリーム色のペンキで手をべたべたにしなが、真っ黒い図書館の壁に、一心不乱に色を塗る子どもたち。そして、隣で一緒に黙々と刷毛を動かす日本の大学生たち（写真奥）。

2013年9月5日、コンポントム州の学校図書館の改装作業の様子です。

この図書館には、これまでに本棚などの備品や図書の子、図書館員研修などを行い、図書館運営の改善に取り組んできました。

このペンキ塗りも、黒い壁で暗い雰囲気だった室内を明るい色に変え、図書館を子どもたちにとってより魅力的な場所にするとうと計画したものです。フィールドワークで訪れていた近畿大学の学生と一緒に行いました。

「子どもたち自身が色を塗るのは良いことですね」と校長先生。

作業開始から約2時間後、いつの間にか色を塗る子どもたちの数が増え、クリーム色の壁の上には赤や青の花、笑顔の絵が描かれました。



現場の教員たちに、図書館活動を伝えたい

ラオス **Laos**

報告：竹谷麻莉子（ラオス事務所）

カンパーン・タンズックカンさん（写真）は、現在SVAが移動図書館活動を行っているヴィエンチャン首都マイバックグム郡の郡教育事務所職員で、教員養成・研修を担当しています。

「生まれは農家で裕福ではありませんでしたが、両親は惜しまずに本を買ってくれました。移動図書館活動を見た時は感動しました。今後、図書館活動を取り入れた教員養成や授業の計画作りをしていきたいですね」。

子どもの頃からの夢だった教師として中学校で教鞭をとった後、ラオス国立大学のラオス語専攻で学び、2009年から同事務所で働いています。

2013年9月に実施した研修会（写真）では、カンパーンさん自身も子どもたちの前で読み聞かせに挑戦しました。「図書館活動は授業をもっと面白くしてくれる。学校現場に活動の意義を伝えていきたいです」。行政の立場から教員たちをサポートできることに、やりがいを感じていると語ってくれました。



国立図書館の子どもの部屋を使いやすく

アフガニスタン **Afghanistan**

報告：三宅隆史（アフガニスタン事務所）

カブール市にある国立図書館の子どもの部屋（写真）の支援を開始しました。国立図書館は、1966年に設立され、73の公共図書館を管轄しており、映画の上映など児童サービスも行われており、ソ連占領時代には、カブール郊外への移動図書館車の活動もしていました。

ところが50万冊の蔵書は内戦およびタリバン時代に8万冊に減り、2002年まで実質閉鎖されていました。現在は、32人の図書館員が働き、蔵書も20万冊にまで増えました。

子どもの部屋には、4000冊の子どもの本、雑誌がありますが、アフガニスタンの公用語であるダリ語、パシュトゥン語の本は1000冊だけでした。専属の図書館員があり、週6日、朝8時から午後6時まで開いています。1日の利用者は小学生10人ほどに留まっています。

SVAではサービス改善のために、図書館員への児童サービスについての研修、720冊の図書の子供、備品の供与を行い、移動図書館活動を月に2回行っています。



ずっと教育への情熱を持ち続けて

報告：ナンタナ・ティンカジョン＝トー（BRC事業事務所）

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ **BRC**

カレン州出身のコーサーさん（写真）は2007年、19歳のとき宣教師と共に国境を越えました。当時ミャンマー（ビルマ）では、教育を受ける機会は非常に限られており、家族を村に残して難民キャンプに来る道を選んだのです。難民キャンプの学校で必死に勉強を続けていたものの、十分な本や自主学習ができる環境が整っていませんでした。

「そのような状況の中で、コミュニティ図書館はもっと勉強したいと思う自分を助けてくれる場所でした」。図書館活動に関心を持った彼は、もともと本が読めると思い、夏休みに図書館員アシスタントとして働き始めました。

学校卒業後は、1年間SVAの難民キャンプ内スタッフに、2013年からはカレン難民委員会教育部会（KRCEE）所属の図書館オフィサーとして、研修講師や報告書のまとめに携わっています。「勉強を続けて、いつか自分の村に帰り、子どもの教育に携わりたいです」。教育に対する情熱は尽きることはありません。





「前浜マリンセンター」(コミュニティセンター) 完成

気仙沼 Japan

報告：青島寿宗(気仙沼事務所)

「以前のように皆で集まることのできる場所が必要だ」。

津波によって全壊した集会場の再建に動き出してから2年。2013年9月15日、落成式(写真は住民による「大漁唄い込み」)が行われました。

行政・支援者との協力により住民主体で集会場を再建するという誰も経験のない取り組みでしたが、建設委員を中心に30回以上話しあいを重ね1歩ずつ進められました。

「できることはみんなでやっべし」。

設計から建材加工、作業場整備、柱みがき、壁ぬりなど、小学生から80代まで住民自ら汗を流してきました。5月には住民手作りの2000個の餅で上棟を祝いました。

再建を通じ、世代を越え関わり、協働してゆくことが地域をつくってゆくことそのものだ、畠山建設委員長は話します。

「センターが出来てよかっただけでは一歩進んだだけ。地域交流や文化活動の拠点となり、地区を越え世代を越えた人のつながりを生み出す場所として活用したい」。



やさしいコーヒーの薫りに包まれて

報告：古賀東彦(岩手事務所)

岩手 Japan

「こりこり、こりこりという優しい音とともに、たちまち集会所の中が幸せな香りで満ちてきて……」。

コーヒーミルの把手を回す岩鼻伸介(写真左奥)さんのもとこかうれしそう。音に惹かれ、匂いに惹かれ、子どもたちが岩鼻さんのまわりに集まってきました。「ほくにもやらせて」とせがむ子も。

岩鼻さんは釜石市鶴住居出身。東日本大震災後、東京での仕事を辞め、故郷に戻ってきました。何度も移動図書館活動を手助けしてくれ、この日もコミュニティ図書室のイベントをお手伝いしてくれました。

現在は、釜石を中心に移動式カフェ「ハピスコーヒー」を運営。ハピス(Happiee)とは幸せ(Happy)のひとつから(Piece)という岩鼻さんの造語です。その言葉通り、岩鼻さんのコーヒーは、ただの飲み物ではありません。気持ちがあらいで、だれかとのんびり話をしたくなる、そんなあたたかさがあります。本の貸し借りだけではない、岩手事務所の活動とどこか通じるところがありそう。こんな仲間がいることが心強く、とてもうれしい。



「いちばん星フェスタ2013イン南相馬」に参加

報告：熊島好一（山元事務所）

山元 Japan

2013年10月13・14日、南相馬市で開かれた地域イベント「いちばん星フェスタ2013イン南相馬プロジェクト」（写真）に山元事務所も移動図書館車を持ち込んで参加。

主催の「いちばん星南相馬」は東日本大震災後、被災者と支援者の縁をつなぐことを目指し、地元ほしいわちの星巖さんが立ち上げた一般社団法人です。

今日の移動図書館は立ち読みのみ。目の前を通り過ぎる多くの人たちの気を少しでもひいたらと、図書館車の前に旅行雑誌やコミック、大型の仕掛け絵本などを並べました。ちょっと一休みの人のほか、じっくり本を読みふける方も案外多く、賑わいました。クラフト・エイドの売り場も併設。それぞれの商品がどのように作られてきたものかスタッフの説明に聞き入り、たくさんお買い求めくださったお母さんも。

食べ物の屋台、音楽ライブ、フラダンスなどのパフォーマンスと、熱気溢れる会場に私たちも同化できたのでは。星さんお誘いありがとうございました。



図書館、識字が事業地の人びとになにを与えられるか

東京 Japan

報告：清野陽子（東京事務所）

秋はイベントシーズン。日本カンボジア外交関係樹立60周年の国際識字デーにカンボジアの識字のことを一緒に楽しく考えたこと、9月6日、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟と共催で「世界が広がる、明日をつくる。カンボジアの過去、今、未来」イベントを開きました。

10月23日には、「読書週間」にあわせて、本をよむこと、図書館のチカラについて考える「すべての人に図書館を Library for All」と題したイベント（写真）を行いました。4カ国の現地職員が一同に会し、図書館で子どもたちがどれだけ生き生きしているか、日々子どもたちと接する職員の声に、参加者もうなづいていました。

左からヴィスナ（カンボジア事務所）、シャザダ（アフガニスタン事務所）、オイ、ノイ（ラオス事務所）、セイラー、トー（ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所）。マイクを持つるのは通訳の小野ミヤンマー（ビルマ）難民事業事務所長。

シヤンティエの精神



「いつも子どもの側に」
顔見知りの子どもがスタッフの手を引いていくのは、カンボジア難民キャンプ時代と変わりません。(カンボジア市内のスラムにて江口スタッフ)

日本

本では、ボランティアといえる活動を、多くの仏教者が社会の中に入り、おこなってきました。その歴史を見ると、宗教の役割について、あらためて考えさせられます。

僧侶たちが中心になって立ち上げたSV Aは、その後、日本中に大きく広がりました。「施し」ではなく、活動地で住民と向きあう姿勢を一貫して続けています。私たちは「なにを大切にしているのか」。土台となる価値観を見つめました。

仏教ボランティアの先駆者

叡尊

えいそん

ボランティアは欧米から伝わったものであり、とくにキリスト者において盛んであると思われがちです。でも、歴史を繙いてみると、いのちがけで弱き立場の人々に寄り添い、行動した多くの仏教者がいるのです。その代表的な一人が鎌倉時代に生きた奈良の僧侶、叡尊です。

『文殊師利般若涅槃経』という經典の中にこのように説かれています。

文殊菩薩がこの地上に現れる時は、貧窮孤独の衆生となって現われる。故に、文殊を礼

拝せんと欲せば、慈悲心を起し、貧窮孤独の衆生を礼拝供養せよ。

叡尊は、この教えにならって奈良の般若野でハンセン病の人々や源平の戦火で生じた流民、そして差別されていた人々に食物を施しました。さらに大釜に湯を沸かし、これらの人々を入浴にいな

ました。「今、生身の文殊さまが入浴されている。さあ、お前たちは、文殊菩薩の背中の垢を流してさし上げよ」と。当時、差別されていた人々をこの



叡尊上人像 (西大寺蔵)

ように遇することはかなり果敢な行動だったはずで、単なる物質援助を超えて、あらゆる人びとの魂の尊厳を守ろうとする並々ならぬ気迫を感じます。

じつは、こうした叡尊に心か

ら私淑していたのが、SV Aの創設者である故有馬実成師でした。(24ページ「ブックガイド」参照)

1979年、曹洞宗の調査団の一員としてカンボジア難民キャンプを初めて訪れた時、あまりの惨状に言葉を失い、思い起こされたのがこの叡尊の姿だったと言います。

そして、「難民キャンプであえぐ人々こそ生きた文殊ではないか」と、日本の人々に難民支援を呼びかけたのです。それが一つの発端となってJSRC(曹洞宗東南アジア難民救済会議)が発足しました。

やがてその活動を引き継いでSV Aが誕生しました。それゆえ、叡尊の行動を範としてSV Aが出発した、と言って決して過言ではないのです。

(SV A専門アドバイザー・大賀俊幸)

協働する 宗教者たち

弱き立場の人びとのために、尽力する地方のご協力者のみなさま。たくさんいらっしやる中から、3人の活動をご紹介します。

寺でもカンボジア支援を始めました。

カンボジアと 東日本復興チャリティ コンサート

源正寺住職 村松功英さん(秋田県)
法光寺住職 佐野俊也さん(北海道)

大震災復興事業にご支援下さっています。

源正寺住職村松さんは法光寺住職佐野俊也さんと家族ぐるみでおつきあい。2カ寺が協働して、支援に取り組んでいます。2009年、法光寺の小学校贈呈式と同行してカンボジアに行ったのがきっかけで、源正

演奏者の善意と、親戚の寺院の協力、来場者など、多くの気持が重なり、2012年には法光寺の寄付とあわせて、カンボジアの学校図書館の建設が



2013年のコンサートの最後に合唱。左が佐野住職

チャリティ 地蔵募金

本寿院住職
三浦尊明さん(東京都)

土で作る仏像「つちぼとけ」を趣味で作っていた三浦さん。仏教をもっと身近にできないかと、始めたのが「つちぼとけ教室」でした。仏様に一歩でも近づこうという修行としての教室は全国に広がっていきました。デパートで開かれた「つちぼとけ展」、生徒さんの心がこも



った仏さまは好評を呼び、完売。回を重ねる毎に広がっていく輪。なにか世の中のために形につながる活動をしたいと、教室のみなさんと考えていたところ、SVAのことを知り、2009年春、ラオスの子どもたちのために学校を建てようという決意。生徒さんとともに作ったつちぼとけを販売、募金活動も広げて、2013年、目標金額を達成しました。一般市民の方へ広がった活動になっています。

「2009年春に小学校建立を発願し、5年後を目標にして募金を開始。ご緑地蔵、ほほえみ地蔵。つくらせていただいた約30000体の地蔵さんを募金箱と共に差し上げ、「会社・お店・自宅で集めてください」とお願いしま



3

した。このほど、やっとやっと、目標金額が集まり、協力者の方々と共にチャリティ国際ボランティア会に目録を手渡す事

ができました。涙がこぼれるうれしい瞬間でした。その後もまだまだ募金が届いています。ありがとうございます。

した「募金は終了したの？」という問い合わせをいただいておりますが、募金は継続しております。これがスタートだと考えております。まだまだ、ますます、支援を続けていく所存です。ので、引き続きよろしくお願ひします(三浦尊明さんのブログ「三休の坊さんブログ」から) 本寿院では、悩み相談をうける「かけこみ相談センター」も、元企業マンの方と一緒に取り組んでいます。

※3月19日から23日、横浜そうにて「チャリティつちぼとけ展示会」が開催されました。たくさん思いがこもった「つちぼとけ」に会いにいらしてください。

- ①本寿院住職三浦尊明さんと教室の生徒さん代表の方から、ラオス学校建設の目録をいただきました
- ②第1回横浜そごう「チャリティつちぼとけ展」で92人の生徒さんとともに
- ③展示会の様子

共に生き、共に学ぶ

難民たちから 教わった 宝もの

私たちが大切にしている「共に生き、共に学ぶ」という姿勢は、難民との出会いの中から生まれ、その後の様々な体験により育てられました。

(SVA専門アドバイザー 大宮俊幸)

「SVAに協力しようと思っただのは、相手から学ぼうという姿勢があるからです」。



施をいただいた。痛棒で一喝された思いだった。仏教のボランティアは単なるチャリティではない。「三輪空寂」の布施こそ、その理想の姿がある。難民たちからそのことを教えられた」。当時の忘れがたい記憶を僧侶の皆さんはこのように伝えてくれました。

仏教では、「布施する者」「布施を受ける者」「布施されるもの」の三者が対等に支え合い、助け合うことが「三輪空寂の布施」と言われます。僧侶たちは

SVAに入職して18年になりますが、支援者の皆さんからしばしば聞かせていただいた言葉です。「共に生き、共に学ぶ」。ここにSVAの大きな特徴があると言えるでしょう。かく言う私自身も、ここに魅力を感じて今日までスタッフを続けてきました。

では、この精神はどのような背景から生まれたのでしょうか。SVAの草創期、すなわちその前身であった「曹洞宗東南アジア難民救済会議（JRSRC）」の時代、難民キャンプで体験した様々な体験の蓄積から紡ぎ出されたものであったようです。象徴的だと思われるエピソードを一つご紹介しましょう。

三輪空寂の布施

1980年、多くの青年僧

難民を助けに行ったつもりでしたが、むしろ難民たちから大きなことを学びました。助ける側、助けられる側の分け隔てなく、お互いに助け合い、学び合うことのおかげがえなさを学んだのです。

「共に生き、共に学ぶ」という私たちが大切にしている精神、そして、相手の文化を理解し、大切にする姿勢はこのような先輩たちの一つ一つの体験から生まれてきたものです。

3・11以降とSVA

さて、東日本大震災という未曾有の試練を経た今、時代は大きく変わりました。科学を偏重し、効率や経済至上主義に立ち、大自然に対する畏敬を忘れてしまった人間の傲慢さ、近代文明の限界が問い直されています。

侶のボランティアたちがタイにあったカンボジア難民キャンプに入った時のこと。鉄条網に囲まれたキャンプの中に入ると、家に入りきれない難民たちが地べたに寝そべっていました。あまりの惨状に一行の誰もが声を失いました。少し広い集会所に案内されると、三体の仏像があつて、身動きができません。難民たちが集まっていました。法要が行われることになっていたのです。そして、そのうち、突然、挨拶をするように言われま



す。同時に、国や政府や大企業に任せっきりにしてはならないこと、平凡な市民一人ひとりが主体性をもって問題解決のために自己ベストを尽くし、協働することが呼びかけられているのではないのでしょうか。私たちが新しい日本人として脱皮していくことが世界の変化の大きな鍵になっているように思えてなりません。それはSVAがめざしている地球市民社会の創造と別の話ではないでしょう。その意味で、いよいよSVAの本領発

した。急なことであり、現状のすこさを目の当たりにしていたので、代表で挨拶に立った僧侶は、「何をしたらいいのかかわかりません。皆さんのことを思って日本から来ました」と、正直に伝えるのがやっとでした。すばに来てこう言うのです。

「何もしてくださらずともいいんです。今、あなたは私の隣にいる。私たちに友人がいるんだということを教えてくれただけで大きな安らぎと励ましになった。今夜はとても嬉しい。そう言つて、その老人はお鉢に入れたミルクを差し出したのです。日本の僧侶たちはジョック以外の何ものでもありませんでした。喰うや喰わずの状況なのに、難民たちはミルクを布施してくれたのです。「助けようと思つて行つたのに、こちらが布

揮の時がきているとも言えます。これまでの経験や蓄積を大切にしながらも、今、日本が必要としているものは何か、世界が必要としているものは何か。そういうスケールに立つて、これからのヴィジョンを考えていかなければなりません。果たして、そういう備えは整っているのでしょうか。たしかに、時代の変化と共に変わらなければならぬもの、変えなければならぬものがあります。ただ、どんな時代になつても、変わってはならないもの、変えてはならないものがあることも確かなことです。「共に生き、共に学ぶ」精神はその重要な一つ。いつまでたつても絶やしてはならないスピリット。いや、それどころか、今後益々、世界に浸透させてゆかねばならない灯であると思われ



写真はすべてサケオ難民キャンプ。集会所で仏像に礼拝するカンボジア難民と曹洞宗僧侶たち(1980年頃)

わたしの

シヤンテイの

精神

鼎談

SVAに関わる若手僧侶たちに、在家出身の伊藤さんも交えて、今こそ必要とされる仏教者の役割と可能性について、共に考えました。

今、ぼくたちが考えていること

有馬 そもそも初期のSVAは、曹洞宗青年会有志が協力者として全国で支えてきた。東京事務所が弱くなっている。これは「町おこし」の問題と同じ構造なのだと考えている。同じことの繰り返しになって疲弊していき、

情報がうまく集まらずに組織の外への広がりがない。後継者となるべき世代が「自分たちの手ではなにかをやる」という意識の弱さ。問題を自分のこととして捕らえられないのではないのか。

自覚 東日本大震災は私たち世代の大きな転換点になったと思います。人口減少で、行政サービスが縮小する未来に向かう。これからの社会は、「民間」の「今ある」ものを使っていかなくてはならない。そこに寺院を活用するべきと考えています。自分が中越地震の救援活動をしていたときは「作務衣で避難所に入らないでくれ」と言われなかった。戦後、行政は宗教を公の場に立ち入らせな

いというスタンスでした。それが東日本大震災の時に変わったのを現場で感じました。僧侶に期待も集まっているし、できるポテンシャルもあるのに、それに気づいている人がまだ少ないのではないかと。

有馬 日本人は日本も知らず、自分の故郷に愛着、関心が薄い。宮藤官九郎もそういう問題意識を持っていてから、「あまちゃん」を書いたんだろうね。これは、日本人としてのアイデンティティの欠落。「地元にかえろう」ではないが、地域を知らず、魅力を感じないから、大切にしない状況になっている。



有馬嗣朗
SVA理事
山口県周南市原江寺住職



伊藤美希
山口県下関市耕雲寺住職
元SVA広報課宗教部門スタッフ
大分県中津市善隆寺副住職



自覚大道

東日本大震災の被災地に元気を

自覚 その中で、有馬さんが現在取り組んでいるのは「あんでねっと」ですね。

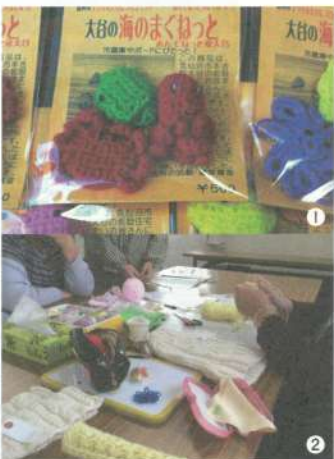
有馬 あのとき、日本中が「なにかしたい」と心が震えたはず。実際にはできなかった人もいると。「あんでねっと」の活動で、自分もみなさんの代わりに行かせてもらっている。と法事でも説明している。「地方の過疎化は深刻。東北では津波で一気に10年分の過疎がすすんだ」と。「10年後の日本の姿がそこにある。それをどう再生させるか」と。外から入った人間が風を吹かせること

を学んでいく。東北の問題は自分たちの地域の問題と増信徒に説明することが自分の責任だと思っている。
自覚 「あんでねっと」の活動について具体的に聞かせてください。
有馬 2011年5月ころだった。復興が長期化するのを見ており、みんな疲れていた。どうしたら、住民が元気になるとか考えていると、女性たちに元気がある。毛糸を持って「アクリルたわし編みませんか」と声をかけたら、乗ってくれた。まず仮設住宅に入居する人へプレゼントし始めた。山口に持ち帰って販売、「売れたよ」と報告したら作り手はびっくり。本格的に売りましょ

うと呼びかけ、ホタテやマンボウなど地域の海の特産品をキャラクターとして「おらが町自慢」にこだわった。
「あんでねっと」で当初からやりたかったことは、他県の編み物グループと交流すること、買ってくれた人を現場に連れて行って「作り手」と会ってもらうこと。作った人に会うと、きつと忘れない。テレビで気仙沼市を見たら意識したり、そういう関係を作りたかった。風化させたくないから、活動を続けようと思う。風化防止にはこうした「えこひいき」根性の助長が大事だと

活動を見てもらい「災害の被害を受けてこんな思いをする人が減るといい」という作り手の思いを伝えたい。カンボジア人が被災地に来てくれて、「そんなに遠くから...タイも津波が大変だったんだよね。カンボジアのポル・ポト政権のことは聞いていたけど、虐殺など大変なことになっているのは知らなくて」と東北の人にもアジアを身

近に感じた。人との交流がそういう気持ちを生む。「阪神・淡路大震災はテレビで見えてショックを受けたけど、そのときは人ごみだった。申し訳なかった」と語っている。それを忘れないでほしい。
お寺でわたしにできることを
自覚 ここから、耕雲寺の住僧伊藤美希さんを



①復興のアクリルたわしプロジェクト「あんでねっと」の新作「海のまぐねっと」②集會室に「あんでねっと」メンバーが集まり、編み物や新作の相談をしている

交えて、お寺の可能性を
考えていきます。

有馬 2002年からミ
ャンマー（ビルマ）難民キ
ャンプを視察、「冬物衣
類を届ける運動」が本格
始動したときから、耕雲
寺さんと一緒に活動して
いる。その運動が終了し
たとき、難民キャンプの
支援は続けていかないと
いけないと「絵本を届け
る運動」を始めた。その
後結婚した美希さんも一
緒にツアーに参加するよ
うになった。

自覚 お寺に嫁いで難
民キャンプに行くって想
像できなかったでしょう。
伊藤 そうですね。で
も話を聞いて共感できた
ので、私にできること
があればと。難民キャン
プには4回行きました。

これからの寺は 世の中で どういう存在で あるべきか

自覚 さきほど話して
おられた過疎化、高齢化
社会へ被災地からのヒン
トは？
有馬 誰も助けてくれな
いのが現状と言えるだろ
う。政府は巨大公共工事
に目が向き、「町を良く
しよう」と考えていない。
地元では「利権」と「し
がらみ」が町おこしの障
害になっている。どちら

現場の様子をお寺にご縁
のある方へ伝えていこう
と、もぞう紙に難民キャ
ンプの写真を貼って本堂
に張り出しました。支援
を継続していかないと
いけないと感じています。

自覚 そのほか、美希
さんは自坊でいろいろな
活動をなさっていますね。
伊藤 同年代の知人に

「お寺って敷居が高い」
と言われたこともあって、
お寺を身近に感じられる
ようにしたい。実は結
婚当初、生活環境の大き
な変化から心身のバラ
ンスを崩した時期があつた
のですが、そのとき本堂
は癒やしてくれる、自分
らしくいられる場所だと
気づいたんです。若い人
にもそういう感覚を味わ
って欲しいと願って、プ

リザーブドフラワーの教
室から始めて、年1回
4日間のヨガイベントで
本堂を開放しています。

自覚 SVAで昨年夏
から始めたチャリティ坐
禅会が人気で、心が疲れ
ている若い人が多いのに
驚いています。そのこと
にお寺はあまり気づいて
いないですね。

伊藤 実際、癒しを求
めている若い人は多いで
すよ。

自覚 活動を始めて2
年ほどですか。手応えは
ありますか。

伊藤 若い人が来てく
れるようになりました。
人が来られると嬉しいで
すよね。ここは日本海側
の漁師町で若い人が都会
に出て行ってしまってい
ます。だから次の世代

にどうつな
げていくか、
魅力あるお
寺づくりを
考えますね。

有馬 行
きやすく、
話しやすい
和尚さんが
いるのが大
事だね。

伊藤 かかりつけ医の
ように、お寺もそうある
といいですね。元気など
きから住職と話して信頼
できていると、自分が望
む最期を迎えられるでし
ようし、次の世代につな
がると思います。

自覚 今後、どうい
うお寺にしていきたいで
すか？

伊藤 しんどい時期が
あつたからこそ、人の思

ているお寺の役に立つよ
うに。今までお寺に來な
かつた人を引きつけるよ
うな助けになれば。

有馬 そこから広げて
欲しいよね。自分の家族

が難民となつていたらど
うだろうと考える。被災
地で感じたことなんだ
が、「海外の難民キャン
プで会った難民と、災害
で家を失った被災者の願
いは同じだ」ということ。
「家に帰りたい。元の生
活に戻りたい」、その願
いをどう現実近づける
か。



いがわかるようになつ
た、自分の役割、天職だ
と感じるようになりまし
た。ご縁をいただいたみ
なさんと笑顔でいられる
ように、人の和がつなが
るイメージでいろいろなこ
とをやっていたい。身
近に感じられるコミュニ
ティスペースにしてい
たいです。

自覚 伊藤さん、あり
がとうございました。

自覚 気仙沼から聞い
たことですが、震災で絆
の大切さに気づいたと言
っているのに、今、被災
地の人々の中に様々な対
立が起こっている。それ
はなぜなんだと。
有馬 そこが本場の課
題。「いがみあい」など
人の根底にある問題にと
う取り組むか。「共に生
き、共に学ぶ」を具現化
すること。そこで、「あ
らんでね」との活動の中
でも気づかされた。日常
的にある人の悩みが解消
することこそ、仏教の本

気づかせる 存在であること

有馬 「町おこし」で対
立するのは、あたりまえ。
それをどうまとめるのか、
本来の意味でのディー
トをするということ。し
こりが残らないように議
論できること。

自覚 健全な議論が大
切なのに、人間同士の感
情的なしがらみが邪魔を
するのですね。



①年1回ヨガ教室に本堂を開
放。3日間に及ぶ本格的な
②ミャンマー（ビルマ）難
民キャンプの様子を伝えている
③お仏壇用お供え花をプリ
ザーブドフラワーで作っている
④本堂でプリザーブドフラ
ワーのアレンジ教室も開いて
いる（耕雲寺）



①本堂前でライブペインティング(聴衆の前で絵を制作) ②敷地の林の中にブースを設けてクラフトも販売 ③読書好きで知られる葦澤住職(①②2012・13年「境内アート小布施×苗市」の様子。実行委員会提供)

●曹洞宗玄照寺
長野県上高井郡小布施町大島90

●周辺の見どころ
まちとよテラス(小布施町立図書館:2011年ライブラリー・オブ・ザ・イヤー受賞) / 北斎館(北斎の内筆画を展示)



●アクセス
長野新幹線・長野駅で長野電鉄のりかえ、小布施駅下車。駅から徒歩30分またはタクシー5分

⑤ 長野県小布施町 玄照寺

日本 しゃんてい ぶしや旅



毎年4月、境内が「境内アト小布施×苗市」の会場になります。江戸時代の山門に毛糸が巻かれ、回廊にインスタレーション、本堂前でのライブ。自由に驚きますが、住職の葦澤義文さんは「普通、ここまでできないでしょうね」と穏やかに微笑んでいます。

「始めたきっかけは、先代住職が町に賑わいを求めて、昭和35年に植木を売る苗市を始めた。近年、来場者が減り、檀家に相談したところ、境内でアート展をすることを提案してもらった。クラフトフェアと統合して、今

では、県内、県外から来る来場者は1万人以上を数え、北信濃で最大の規模です」。

交流も大きな魅力になっている。出品者、作家と実行委員会、町の人が顔をあわせる懇親会。「住民同士が顔見知り。何かをやるうとすると、声をかける人の顔が浮かぶ」というつながりを大切にしています。

小布施町には北斎を招き交流したDNAが今も生きています

「そうですね。地域に開かれた寺でありたいという思いを先代から引きついでいます」。

BOOK GUIDE

仏教ボランティアについて 深めるための4冊



泥の菩薩
NGOに生きた仏教者 有馬実成
大菅俊幸 著 (大玉輪閣)

SVAの創始者であり、初代専務理事の有馬実成師は、仏教者の役目を問い、地域に密着した寺院の復興や文化活動、在日朝鮮人・韓国人還骨返還運動などに取り組んだ。1979年、インドシナ難民支援の道に進む。日本のNGOの先駆者としての歩みをまとめた。

持戒の聖者 寂尊・忍性
松尾剛次 編 (吉川弘文館)

戒律の復興を志し、多くの民衆を救済することによって菩薩と呼ばれた寂尊。また、寂尊に師事して鎌倉に戒律を広め、様々な社会事業を行って鎌倉時代版マザーテレサとも評される忍性。この二人の僧の生涯を追求した書は数ほんとないだけに貴重な一冊。



地球寂靜 ボランティアが未来を変える NGOは世界を変える
有馬実成 著 (アカデミア出版会)

SVA初代専務理事であり、日本のNGO界のリーダーでもあったが、2000年に65歳で他界した有馬実成。思想やSVAでの活動を知ることができるように、その生前の講演、対談、執筆原稿をまとめた遺稿集。

旅の勸進聖 重源
中尾堯 編 (吉川弘文館)

平家の焼き討ちにあって炎上した東大寺を、全国への勸進活動によって見事に復興した平安時代の仏教者、重源。その生涯と事績について紹介する一書。有馬実成元専務理事は重源のネットワークする力に着目し、NGOに必要なことを学ぼうとしていた。



有馬 地元に住民だけでは「しがらみ」から抜けられないからこそ、フアシリテーターを育てないといけない。相手に気づかせる役割だ。

自覚 それは外部から入った、利害関係のない人間にこそできることですね。

有馬 寺に相談に来る人に接するときもそうだろう。相手が話したいことを聞き出したり、それもフアシリテートだね。その力が僧侶に必要な「気づかせること」、「気づくこと」が仏教。

自覚 気仙沼事業の目的は「住民のエンパワメント」だと言っているが、この話で腑に落ちた。

有馬 SVAは、海外の現場に行った人たちが自分の足下(地元・地域)を見直せるようにフアシリテートしていけない。問題投げはならない。問題をつけてこそそのスタディツアーなんだという意識をスタッフが持つべきだ。

自覚 SVAの役割は「フアシリテート」だと。有馬 仏教では「対機説法」として昔から行われてきたこと。聞く人に合わせた説法をしようという話。漁師に畑のたとえ話をしてもピンとこない。漁でたとえましようということ。ぼくは時間をかけて話をするし、納得するまで話を聞く。父(有馬実成)が生

前、徳山に戻った週末に、いつも夜遅くまで増信徒と話をしていた。教えてもらったことはないけど、見てたんでしょね。

自覚 海外、被災地、地元と3人の活動の場はそれぞれですが、人と人をつなぐ活動を続けていきたいですね。(聞き手:広報課 清野陽子)



世界の絵本を読んでみよう⑤
創作絵本 カンボジア(2005年)

カメールの宝物

2 仏教寺院に行き、さまざまな仏教儀式をおこなう、徳を積みます。



3 カンボジア正月には楽しいお祭りがおこなわれるので、お年寄りから子どもまで、お正月を心待ちにしています。お正月は4月13日、または14日です。



1 仏教は紀元前3世紀にカンボジアに伝えられました。カンボジア人は仏教を崇拝しており、心の支えになっています。仏教の教えにしたがって生活しています。



ព្រះពុទ្ធសាសនាដែលជាមតិដ៏ល្អប្រសើររបស់ជនជាតិខ្មែរ ។ ព្រះពុទ្ធសាសនាបានចូលមកប្រតិបត្តិទៅក្នុងប្រទេសកម្ពុជា មុនគ្រឹះស្ថានណាមួយ ។ ប្រជាជនខ្មែរគោរព និងធ្វើសក្ការៈបូជាចំពោះព្រះពុទ្ធសាសនា ។

カンボジア人は仏教の教えに従って生活しています。仏教は紀元前3世紀にカンボジアに伝えられました。カンボジア人は仏教を崇拝しており、心の支えになっています。



5 日本のお盆にあたるプチュンベンには、亡くなった親戚や祖先のたましいが救われることを願って、お寺にお参りし、僧侶に食べ物を喜捨します。



4 「雨安居」雨季3カ月間、僧侶が寺にこもり、仏教の教えを勉強し修行に励みます。住民は巨大なろうそくを喜進します。



6 暮らしに必要な学校や病院、道路、橋、池、井戸を作るために寄付を募ることがあります。そのための儀式をおこないます。



7 カンボジア人には祖先からすばらしい伝統と文化が伝えられています。子どもたちも、文化遺産である仏教、文化、慣習を知り、守っていつてくれることを望みます。平和な社会作りにも大切な仕事です。

シャンティな 人たち शांति

vol.
64

星野光
ほしのこういち
平野智也
ひらのともや

NECソフト株式会社
経営企画本部 CSR推進部

社会の課題を共に 解決していくために

2002年、当時の担当者がSVAのホームページで「絵本を届ける運動を目に止めた」とがきっかけで参加、12年間のべ3000冊の協力をいただいている。2005年からは、他社での取り組みを参考に、社員が読まなくなった本を持ちよりに社内販売する「古本楽市」というプログラムも開始された。毎年10万円以上を売り上げ、アフガニスタンの絵本出版に寄付されている。残った本も「リサイクル・ブック・エイト」に寄贈され、海外での図書館活動募金となっている。

CSR推進部の星野さん(写真右)は、ITの力で社会課題を解決できるような技術者を志し入社したが、気づけば社会貢献9年目のベテラン。「絵本を届ける運動」をきっかけに、社員の目線が高くなったと確信しています。当社は課題を解決する情報システムを提供する会社ですが、今後は社会課題を解決する手段やシステムを自ら提供できる社員を増やしたいと思っています。「次の世代の子供たちの教育をよりよくする仕組み」を作ることが私たちの夢です」。

入社3年目、自身も聴覚障がいを持ちながら、社会貢献担当を担っている平野さん(写真左)は、「当初『絵本を届ける運動』のような簡単な作業で本当に役に立つのか疑問に思っていました。でも何回か参加してい

るうちに、世界を知る必要な機会と感じました。寄付以外にもできることがありますね」と話す。

自治体との連携で、毎朝社員が新木場駅前の清掃活動を行っている。新木場は住宅地ではないため、駅の利用者は勤労者かイベントで訪れる人に限られ、ポイ捨てされるごみの量が多かった。捨てにくい環境づくりのため、ごみを拾い続け、駅前にはハーブガーデンを整備した。ハーブガ

デンができたことで確実にごみの量は減ったという。育てられたハーブは、東日本大震災復興支援を行う「あんでねっと」が作るナイロンた



本を持ち寄る「古本楽市」、新木場駅前のハーブガーデン(写真提供:NECソフト株式会社)

わし「福香(復興)まんぼう」の香りづけにも利用されている。企業が本来営利目的で、「自利」を求めるのに対し、対極の非営利で「利他」にあるNPOや行政と組むことで新しいアイデアや視点が得られる。「社会に足りないものはなにか?」をきっかけに連携することから社会の課題が見えると話す。

を紹介するスマートフォンアプリを作成、江東区に無償で提供した。過去にはSVAでも参加者にわかりやすく伝えられるようにとホームページ用に絵本の作り方や、絵本の返送の仕方などの映像を作成いただいたこともある。気軽に参加できるボランティアからNECソフト(株)だからできる社会貢献にシフトが進んでいる。

(国内事業課 野口早苗)

フィリピン台風支援活動にご協力お願いします

2013年11月8日に発生した台風ハイエンは、フィリピン中部の島々に大きな被害を及ぼしました。必要最低限の衣食住も満たされない地域がたくさんあります。11月22日に職員を派遣、サマル島にて被災状況やニーズ把握のための調査を実施。12月初旬より食糧や衣類などの配布を、続いて家屋再建に必要な材料や工具を、東サマル州の被災者に配布しました。必要に応じて教育支援を行う予定です。被害の大きさから中期的な支援が必要な状況です。(緊急救援室長 木村万里子)

郵便振替：00150-9-61724

加入者名：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
*通信欄に「フィリピン台風」、備考欄に「免」と明記ください(手数料免除)

ミャンマー水害被災地支援を終了しました

2013年7月下旬の大雨で、南東部のカレン州・モン州などで大きな被害が生じました。特に取り残されている地域の被災者に対して、生活復旧及び学習支援を実施。約900世帯に衛生環境を改善する砂ろ過器などの物資を、800人の子ども達に制服や文房具などを届けました。

カンボジア水害支援を終了しました

10月中旬から深刻化した洪水の被災者を対象に、緊急救援活動を行いました。被害の深刻なバタンバン州のオー・タキ集村の672世帯にテントと米の配布を実施。パンティミンチェイ州プニアット集村とパット・トラング集村の1,549世帯に、食糧配布を実施しました。

人事のお知らせ

●入職

岡本喜代……東京事務所国内事業課課長補佐(12月1日付)
斉藤英雄……東京事務所広報課 課長補佐兼ファンドレイジング担当(12月1日付)

●退職

伊藤解子……
ラオス事務所所長代行(10月3日付)

●異動

吉川剛……経理・総務課課長補佐より、経理・総務課課長へ(10月1日付)

総会のお知らせ

社員会員には総会での議決権があります。3月初旬にご案内と資料をお送りしますので、よろしくお願いいたします。賛助会員の皆さまもSVAの事業を詳しく見られる機会です。どうぞご来場ください。

日時 2014年3月29日(土) 午後
(詳細は同封のご案内にて)

主な議題 2013年度事業報告・決算報告について
2014年度事業計画案・予算案について

編集後記

昨年から準備していた、ミャンマーでの事業がいよいよ始まります。団体として変化が大きなこの数年ですが、歴史にあぐらをかかず、活動地の未来のためによりよい事業ができるよう、スタッフ一同努めて参ります。(清野陽子)

シャンティ 2014年冬 273号

2014年1月1日発行

発行人 若林義英
発行所 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大塚町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB: http://www.sva.or.jp E-Mail: info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

編集人 関尚士
装丁・レイアウト 矢萩多聞+いわながとこ
印刷 株式会社大川印刷

定価550円

©2013. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

これがワタシのチカラになる!



スタッフの晩ごはん



現地責任者
白鳥さん

気仙沼事務所の職員さん、

今日の晩ごはんは
なんですか？

プログラム責任者
東さん

長期ボランティア
武田さん

広報担当
里見さん

経理担当
三浦さん

から揚げ

トン汁

サラダ

茄子の揚げ浸し



気仙沼産(八菜水産)の塩辛

長期ボランティア
青島さん

漁師さんから
もらったイクラ



調理担当
吉田さん



新鮮なイカ・
つぶ貝の刺身



長期ボランティア
須賀さん

手づくりのブルーベリージャム

漁師さんからも
もらった鮭で作った
鱈鱈

気仙沼事務所では、ボランティアさんや長期ボランティアスタッフがため、夕食は20人ほどの大所帯になります。スタッフが交代で料理をしてクタクタになっていましたが、2011年9月から気仙沼市出身の吉田さんに夕食の調理をお願いしています。吉田さんのおいしい晩ごはんは活動の原動力。昼間はそれぞれに活動するメンバーがあつまると貴重な交流の場でもあります。昼ごはんは活動の合間に先で食べたり、事務所に戻って簡単にすませることが多いため、あつたかい晩ごはんもメンバー同士の会話が何よりのチームビルディングになっています。活動している気仙沼市南部の住民の方々から、差し入れをいただくこともあり、贅沢な旬の海の幸も楽しみます。(東さやか談)



「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。

道

真に人は平等なのだ
 気付き気付かされる
 ことこそが
 ボランティアであり、
 支援なのだ



「あんでねっと」は被災された方々のコミュニティ、ネットワーク支援を目的としたプロジェクトです。宮城県気仙沼市、岩手県山田町で活動中

本当の支援活動とは
 人の意識を変えること

理事 有馬嗣朗ありましろ

小学生3年生頃だったろうか。父（有馬実成）と顔を合わせる事がなくなつた。決して失踪したわけではない。平日は東京（SVA）、週末は職務。朝早くから夕食時間を過ぎての帰宅。たまに家にも溜まった寺の事務仕事に電話が鳴り響く。事務所に籠もりっぱなし。こちらとしては叱られなくて済むと安堵しつつ、寺の坊さんって大変なんだなと何となく後ろ姿を見ていたように思う。

SVAの活動に魅了されたのは、まだ始まったばかりのミャンマー（ビルマ）難民キャンプに衣類を贈る運動だった。2002年、初めてのキャン

プ訪問はシヨツキングだった。キャンプで誕生すれば30才になる民がいること。もし、帰還することが出来ても与えられない難民生活しか知らない者が田畑を耕すどころか生活を送ることさえ出来ない。カンボジア難民キャンプでのSVAの活動が腑に落ちた。だからSVAの活動は教育にあり、知識は自立を促す活動なんだと理解した。

現在、BRCの活動支援を継続する一方、2011年5月頃から「あんでねっと」という東日本大震災コミュニティ支援活動を始め毎月東北に通っている。

復興の現実には衝突に混沌が日常。いや、時が経つほどに日常が復興を妨げている。「あんでねっと」として新たに活動を始める集会所へ活動内容を話しに行くことに当初は

快諾した隣町で活動してるメンバーが、次の訪問時には「こっちが行くことはない、新参者が来るのが当たり前」と言われた。先方に悪気は全くなかったが正直だ。お互い様ではないか。でも避難所でも物をもらった人、もらってない人、家を流された人、流されなかった人で喧嘩があった。

差別や妬みこそ復興を妨げる最大の敵なのだ。そこで気付いた。本当の支援活動とは人の意識を変えることだと。

SVAの理念である「共に生き、共に学ぶ」とは人は常に平等であり生き方を豊かにさせることだ。まさに宗教が持つ根本の教えなのだ。だから宗教そのものがNGOであり活動なのだ。真に人は平等なのだと気付き気付かされることこそがボランティアであり、支援なのだと思う。（山口県・原江寺住職）